博 士（文 学） サディグル エルドス ラキムジャン

学 位 論 文 題 名

日本語とカザフ語のオノマトペ語彙の対照研究

学位論文内容の要旨

本論文は，日本語のオノマトペと申請者の母語であるカザフ語のオノマトペを言語学的に分析し，両言語の対照を試みたものである。オノマトペは音象徴（sound symbolism）の面から言語の非恣意性を示す代表的な言語現象であり、日本語やカザフ語においては，豊かな生命力を持つ言語要素である。しかし，恣意性を基盤とするソシュール以来の構造言語学的な研究の対象からは外れた存在であるために，音象徴を論ずる材料としてのみ注目され，形態・統語・意味といった言語学のオーソドックスな研究の対象とは見なされてこなかった。近年、ようやく日本語オノマトペの研究が活発になされるようになってきた。本論文は，近年の日本語オノマトペの先行研究を基盤として，形態・統語・意味の面から全面的にオノマトペを分析し，日本語・カザフ語両言語のオノマトペの全体像を明らかにしようとするものである。

本研究がとる方法は，①オノマトペとしてとりあげる範囲を専門辞書記載語にしぼる，②オノマトペで表される対象の類別に基づいて擬声語・擬音語・擬態語・擬情語という下位類を設定する，③語基と派生に着目した形態的分析，多義の傾向に着目した意味派生の分析，動詞・形容詞・副詞的用法ごとの統語的分析をそれぞれ行い，下位類間での差異を明らかにし，両言語間で対照する，④以上の分析を語彙化の程度として総括する，というものである。

第1章序論では，研究の前提となる事項について述べている。

第1部は①と②の段階を説明する。第2章で，音象徴（sound symbolism）に関する先行研究とオノマトペの定義について論じ，第3章で，オノマトペの分析，両言語のデータベース（本論文の付録に収録）の作成と分析結果を報告している。

第4～7章からなる第2部本論は③を論じている。第4章で，語基とそれに関する諸問題について検討し，第5章で，オノマトペの派生過程における構成要素を考察し，それが両言語下位類のオノマトペにどのように出現しているのかを明らかにしている。第6章で，オノマトペにおける多義現象について調査し，擬音語から擬態語への意味拡張が生じたという仮説を認知言語学の立場から解明している。第7章で，統語的な側面から考察を行い，両言語のオノマトペの統語的な属性を明らかにしている。

第 3 部結論は④総括である。第 8 章で，オノマトペにおける語彙化の段階を設定した上で，両言語オノマトペはどの段階に属するのかについて解明している。第 9 章は研究のまとめである。

学位論文審査の要旨

主　査　　教　授　　小　野　芳　彦

副　査　　教　授　　佐　藤　知　己

副　査　　教　授　　津　曲　敏　郎

学 位 論 文 題 名

日本語とカザフ語のオノマトペ語彙の対照研究

平成21年12月18日(金)文学研究科教授会の承認のもと、上記３名をもって本論文の審査委員会を組織し、計５回の審査を行った。

- 平成21年12月18日(金)　第１回審査委員会(電子メールによる)

論文のコピーを配布し、各自が 1) 論文の内容と構成、2) 記述の正確さと的確さ、3) 参照論文読解の的確性、4) 立論の妥当性を確認することを打ち合わせた。

- 平成22年1月21日(木)　第２回審査委員会

全委員から、重大な疑問点がないことを確認し、次いで、各委員が問題点を指摘し、合議の上、a) 字句の訂正を求めるもの、b) 事前に指摘して回答を求めるもの、c) 口述試験において質問するものに分類整理した。

- 平成22年２月４日()　第３回審査委員会

申請者の口述試験を実施し、プレゼンテーションの能力と質疑への対応能力を確認した。

- 平成20年２月４日()　第４回審査委員会

学位授与の可否を判定した。

- 平成20年２月日()　第５回審査委員会(電子メールによる)

配布した主査の案をもとに、教授会報告資料最終案を決定した。

以下に、本論文の主要な評価事項を７つ述べる。

(1) 申請者にとって外国語である日本語のオノマトペを収集するのに複数の専門辞書を対照して語彙を確定させており，そのことで分析を数量化することに成功している。日本語のオノマトペ語彙と分析の質をそろえるため，内省の利くカザフ語も専門辞書から語彙を収集している。

(2) 研究対象の確定と下位類の設定に対して説得的根拠を与えている。本論文は，広義レベルで広義擬音語と広義擬態語に２分し，それぞれをさらに狭義レベルで２分し，擬声語・擬音語・擬態語・擬情語という下位類を設定した。その下位類は，結果的には先行研究の部分的採用となったが，妥当な分類根拠を与えている。また，傾向があるという指摘に留まっていた言語学的な分析をはじめて数値化して，有効な下位類になっていることを示し

た。

(3) オノマトペを一般の語と区別する特徴となっている形態的要素を抽出して，日本語とカザフ語を対照している。カザフ語が子音＋母音＋子音という音節を基本とする言語であるのに対して，日本語は子音＋母音を中心とするモーラ型の言語であることを反映して，語基の構造は相当の隔たりを見せるが，派生形を生成する接辞や反復といった構成要素が共通性を見せることを示している。さらに，設定した下位類ごとに集計すると，両言語とも構成要素の分布に偏りが見られること，そして広義擬態語が豊富な派生形をもつことをはじめて示した。

(4) オノマトペの対象との結びつきの強さからすれば意外に思われるくらい日本語のオノマトペは多義である。オノマトペの多義の程度を，下位類内のもの（単一多義型）と下位類をまたぐもの(混成型)とで分類して示し，さらに両言語で比較している。全般的な比較から，日本語は多義傾向が高く，カザフ語は単義傾向であることが示されているが，単一多義型・混成型ともに，擬態語の多義性が高いことを示した。

(5) 日本語に多く見られる多義混成語の下位類の組み合わせから，擬音語から擬態語への意味の拡張(転義)のモデルを立てて，両言語の２・３のオノマトペ語群やオノマトペ接辞にそのモデルが当てはまることを示した。このモデルが示す転義の方向から，オノマトペの抽象化と語彙化の進行を論じている。

(6) 両言語のオノマトペの品詞別用法を比較した。日本語はほとんどすべてが副詞用法をもち，擬態語が「する」を伴って動詞用法を持つこと，カザフ語はほとんどすべてが「する」にあたる特定の助動詞を伴って動詞や副詞となる用法を持ち，擬態語が別の助動詞3種を伴って動詞用法を持つという対照的な分析を示した。

(7) 続いて，オノマトペを統語的に支えている中心的なものが，日本語では「と」と「する」であり，カザフ語では「する」にあたる助動詞であるという共通点も見出し，それらの下位類ごとの分布を示すことで，オノマトペが引用と動詞化によって一般語彙化を進行させるというモデルを提示した。

オノマトペの研究において，恣意性の問題に深入りせずに，言語学のオーソドックスな研究手法を適用して多くの成果を挙げたことは大いに評価される。申請者にとって母語ではない日本語についての研究として高いレベルにある本論文は，今後，オノマトペについての他の言語での研究にとって参照されるべきものとなると予想される。

オノマトペをどう規定するかについては，本論文でも試みてはいるが，結果として先行研究の辞書に依存したことは物足りなさを感じさせる。今後の独自の取り組みが期待される。また，カザフ語の統語的分析が日本語ほど精緻でない結果にいたっていることが，未解決の問題として残っており，今後の研究のいっそうの展開が待たれる。

このような改善すべき点が見られるものの，本論文は充分な成果を得ており，オノマトペ対照研究の模範と評価することが出来る。審査委員会は全員一致して，本論文が博士（文学）の学位授与に相応しいものであるとの結論に達した。